



【「物品」の理解のフレーム】

メッセージを伴った物品

「花が届く」

→愛情

「飼い猫の死体が届く」

→恨み

出来事の段階の焦点と視点の違い

【「視点」と「焦点」がそれぞれどこにあるか？】

- ・「届く」は物品・情報が**目的地**に到達した段階を**焦点**としている。
 - ・基本的な意義では**視点**も**目的地**にある
例)「弟から(私に)礼状が届いた」
「* 私から弟に礼状が届いた」
 - ・しかし「願いが届く」の意義の場合には**焦点**は**相手**にあるが、**視点**は**出発点**にある
例)「私の気持ちが片思いの相手に届いた」
「* 同級生の女の子の気持ちが私に届いた」
- ・すなわち出発点から目的地を見ているという事態である
- ・したがって届いたかどうかは現地で確認できないので、反応によって判断しなければならない
 - ・「願い」などは私的なものであるので、**視点を置く優先度が高い**

フレームと人称制限の関係

- 着点が注意を向けられる焦点となっている。
- 到着後の処理の含み(準備完了)やすすでにどの程度の処理がなされているかは物品や情報の種類によって適切なフレームと結び付けられる。
- 視点は多くの場合着点にあるが、「願い」などの場合には主観性によって出発点に視点がある。
- 到着の認識者が視点保持者となる。
- 視点保持者が到着の確認が出来るという条件を満たさなければならない。つながったフレームの出来事の段階で到着の確認が少なくとも出来る段階まで進行していなくてはならない。